

# プラトンと独り語り——『ティマイオス』を中心に

松井 貴英

## 1 序

プラトンは、アテナイで市民たちと問答を繰り返していた師ソクラテスを登場人物とした対話篇を多く著した。もちろん対話の内容やその方法等、解釈上のまた哲学上の問題も多いことは確かであるけれども、そのような形式により展開される哲学問答はプラトンの哲学における重要な位置を占めるものである。

では、問答という形式以外についてはどうだろうか。プラトンは、独り語りあるいはそれに近い形式を採用した対話篇（ソクラテスあるいは対話の相手による長い発言は、それに該当するだろうし、『ソクラテスの弁明』におけるソクラテスによる法廷弁論もこの中に入るといえるだろう）や書簡を幾つか残している。哲学問答ではない独り語りやプラトンの対話篇において登場することは、プラトンの哲学においてどのような意味を有しているといえるだろうか。本論考においては、特に『ティマイオス』における冒頭部分から序盤にかけての箇所、そして「ありそうな話」として宇宙創成のミュートスが語られること等を扱いつつ、この問題について考えていく。

## 2 プラトンと語りについて

プラトンの著作は、その多くが登場人物であるソクラテスと対話の相手により展開される問答を書き綴ったという体裁で展開される対話篇である。そして、それぞれの対話篇において展開される対話は、それぞれの対話篇において、その全体としてあるいは部分的にでも、エレンコスであったり論争的なものであったり、あるいはそれとは対照的に友好的に問答が展開されるようなものであったりする。それらにおいては、短い発言の応酬がなされることもあるし、その反対に長台詞が語られたりすることもあつた。このように、プラトンの対話篇の展開は、形式的な面においてのみであつても、

さまざまであり多様である。

また、対話篇の中に、独り語りや差し挟まれたり、その大半が独り語りとなっていたりすることもある。たとえば、『ソクラテスの弁明』においては、アニュトスの使い走りであろうメレトスという若者により告発されたソクラテスの法廷弁論であり、ソクラテスがアテナイ市民に語るという法廷弁論の体裁が採られている。その他には、書簡も独り語りに近いものであるともいえよう<sup>(1)</sup>。『ソクラテスの弁明』は法廷弁論であるという点で特殊な対話篇であるし、書簡はそもそも対話篇ではないが、このようにプラトンの著作において独り語りやしばしば展開されることがあるということを示すものであるとも解されよう。

対話の中で長々と登場人物が語るという展開となっている対話篇には、たとえば『ゴルギアス』が挙げられよう。この対話篇においては、ソクラテスと三人目の対話の相手であるカリクレスが論争的に対話を展開させる。その中で、両者は長々と自らの主張を展開させる。このような展開となっていることは、この対話篇の冒頭における「論争や争いについて、ソクラテス、そのような仕方に参加しなければならないと人々は言っています」(447a) というカリクレスの発言に端的に表現されているように思われる。このカリクレスの発言は、ゴルギアスの素晴らしい弁論が終わった後にやってきたソクラテスに対してカリクレスが述べた発言である。また、「そのような仕方」というのはソクラテスが遅れてやってきたことを表している。このような仕方では冒頭においてこの対話篇において展開される論争的な対話がこの対話篇において展開されることになることが暗示されている。<sup>(2)</sup>

その他の対話篇における独り語りとしては、『饗宴』『パイドロス』が挙げられよう。『饗宴』においては、それぞれの話者が恋について、それにまつわる話を長々と語る。『パイドロス』においては、ソクラテスとパイソロスがミュートスとして長々と話をする。また、『パイドン』『国家』『テアイテス』のように、劇中劇として対話篇が展開されることから、対話篇の冒頭箇所でも独り語りとして対話篇が述べられているのだということを示している対話篇もある。『パイドン』はソクラテス最後の日に立ち会った際のその場の再現として対話が展開され、『国家』はソクラテスが昨日このような対話をしたということを冒頭で短く述べることにより始まり、『テアイテス』はテアイテスとソクラテスの問答をソクラテスに何度も聞きながら書き留めたものが読み上げられるという体裁で対話が展開される。

プラトンが『国家』の後に続く対話篇であることを意識して著したであろうことは疑いのない<sup>④</sup>対話篇であるとも解される『ティマイオス』と『クリティアス』は、ともにミュートスとして、主題に関する内容が語られる。『ティマイオス』における宇宙創成のミュートスは、ティマイオスによる「ありそうな話」としての独り語りであるし、『クリティアス』におけるアトランティスの話は、クリティアスによる独り語りである。

このように、独り語りあるいはそれに近いような語りがみられるプラトンの幾つかの対話篇（と書簡）の中から、これ以降では、先にも簡単にではあるが言及した、ミュートスとしてその内容が語られる後期対話篇である『ティマイオス』を扱いながら考えていく。特に、この対話篇において語られる宇宙創成のミュートスが「ありそうな話」として語られていることに関して、特に冒頭の箇所を中心に扱いながら、考えていくとする。

### 3 『ティマイオス』の冒頭から序盤に関して

まず、『ティマイオス』冒頭のソクラテスの発言を見てみよう。

ソクラテス「一、二、三……、四人目は、親愛なるティマイオスよ、どこにいるのかい？ 昨日は私をもてなし、今日は私をもてなすはずの——」  
(4) (70a)

このようなソクラテスの発言から始まる『ティマイオス』は、前日にソクラテスにもてなされたティマイオス、クリティアス、ヘルモクラテスともうひとりの四人のうち、ティマイオスが、ソクラテスとの約束であるもてなしのお返しをするべく、宇宙創成のミュートスを語ることになるという設定を踏まえつつ、天体論、後期イデア論、場の理論、音階論、要素三角形等が提示される、プラトンの後期対話篇の主要対話篇のひとつである。先述のように、この対話篇は、主にティマイオスの独り語りにより進められる。

これ以降では、このような対話篇である『ティマイオス』の冒頭から、ティマイオスがミュートスを語り始めるまでの序盤の箇所に関する検討を行いつつ、プラトンが

『ティマイオス』をどのような位置づけの対話篇であると考えていたかを探っていく。その前に、ソクラテス以外の四人について、簡単に確認しておくこととしよう。

### 3-1 ソクラテス以外の四人について

先に述べたように、この対話篇において場面設定されている日の前日にソクラテスがもてなしたティマイオス、クリティアス、ヘルモクラテスとこの日欠席したもう一人の四人の中から順番にもてなしがなされることとなり、ティマイオスが最初にソクラテスをもてなすこととなる。そして、ティマイオスが宇宙創成のミュートスを語り終えると、未完の対話篇である『クリティアス』において、アトランティスについて語られることとなる。

ソクラテスへのもてなしは、このような展開となっていくのであるが、プラトンによるこれらもてなしについての一連の構想は、『ティマイオス』が執筆され始めた時点でどこまで具体的に構想されていたのだろうか。プラトンがヘルモクラテスにももてなしをさせようとしていた可能性は、ある程度の高さをもってたと解することもできよう。それは、次に示す箇所から解されよう。ひとつは、ヘルモクラテスに「ええまったく、このティマイオスが言ったように、ソクラテス、我々はおもてなしのお返しをする熱意を欠くことはいささかもないでしょうし、また、それをしないでおく口実も、少しもないのです」（『ティマイオス』20c）と語らせている箇所である。次には、『クリティアス』の序盤でソクラテスに「もちろんですとも、クリティアス、なんでためらいましょう？ 大きな気持ちでお話をうかがうということについてはね。それにまた、私どもは第三の語り手であるヘルモクラテスにも、同じような寛大な気持ちで接しなければなりませんまい」（『クリティアス』108a）と語らせ<sup>6)</sup>、さらには、クリティアスに「君は、自分の番が後の方だし……」（108c）と語らせている箇所である。このような発言がそれぞれの対話篇の序盤でなされていることから、そのように解することが妥当であるといえるだろう。

とはいえ、『ティマイオス』の序盤ではヘルモクラテスが第三の語り手となることは明言されていない。27a-bにおいて、クリティアスは、まずティマイオスが宇宙の生成について語り、次にティマイオスからは、ミュートスにより出生させた人間を受け取り、ソクラテスからは、その人間のうちで特によく教育された一部のものを受け

取ったつもりになり、我々を陪審員とする法廷に出頭させ、彼らこそ、かの聖なる文書に記された伝承が、その消滅を告げている、かの往時のアテナイ人に他ならないとして、彼らについての話をしていく——と決まるとされるが、ここにヘルモクラテスに関する言及、すなわち、クリティアスのもてなしの後に、ヘルモクラテスがどのようなもてなしをするかということ以前に、彼がもてなしをするかさえ述べられていない。他方、『クリティアス』の序盤（108a-c）においては、ヘルモクラテスが第三の語り手となることは明示されているものの、どのようなテーマでもてなしの語りをするかは明示されていない。それに対して、クリティアスに関しては、『ティマイオス』の序盤において、クリティアスに「驚嘆すべき偉業の数々が、その昔、アテナイの国によって成し遂げられていた」（20e）ことについての話（21a-26e）をさせている。この両者がこの先に行くであろうとされるもてなしを予想させる言及には、大きな差がある。

これらから、プラトンが、ヘルモクラテスによるもてなしの内容について、『クリティアス』執筆開始時においてもまだ決めていなかった可能性もあり、また『ティマイオス』執筆時においては、ヘルモクラテスに何を語らせようかという以前に、語らせることさえ想定していなかったと解する可能性も見出すことができるように思われる。そうであれば、「ええまったく、このティマイオスが言ったように、ソクラテス、我々はお返しをする熱意をかくことはいささかもないでしょうし、また、それをしないでおく口実も、少しもないのです」（『ティマイオス』20c）というヘルモクラテスの発言の「我々」が、昨日の時点では（『ティマイオス』冒頭で欠席しているとされている四人目も含めての）四人が、この日の時点では三人が順番に語ることを含意しておらず、この「我々」のうちのティマイオスとクリティアスの二名によるお返しが予定されているのみであったと解することも可能であるように思われる。

### 3-2 欠席した四人目について

また、この日に欠席した四人目について、それが誰であったか、名前さえ言及されていない点についても触れておきたい。この四人目が誰であったかを探ろうとする試みは、古くはプロクロス<sup>6)</sup>も言及しているなど、解釈者たちを悩ます問題であることは確かである。しかし、本論考では、欠席したのは誰だったのかを特定するといった

このような方向からのアプローチは行わず、次のような解釈が可能ではないだろうかという提案を述べるにとどめておきたい。それは、ここまでで考察したヘルモクラテスのもてなしについての解釈にも関わるものである。

もしプラトンがはじめからヘルモクラテスにもてなしをさせるつもりがないと解するとしたら、その根拠をどこに見出すことになるだろうか。たとえば、仮に前日のソクラテスによるもてなしに参加した四人全員が翌日以降(すなわち『ティマイオス』と『クリティアス』において)も登場したとなれば、前日に約束したもてなしを四人全員にさせることになるのでプラトンも想定することになるだろうし、読者もそれを期待するのではないだろうか。しかし、この日は欠席した四人目の彼は、その場にいなのであるから、もてなしをすることができない。このことは、ソクラテスをもてなすという約束を、四人全員が一人ずつ行うことを果しえなかったということを意味する。そして、プラトンが『ティマイオス』執筆開始時点でそれを意図して四人目が欠席したという構成にしたと解することもできよう。そして、もし出席していたなら、あるいは欠席していたとしても四人目の名前が示されていたならば、それが誰であれ彼が話す内容は一体どのようなものであったといえるかを、解釈者たちは詮索し、また解釈しようとするであろう。プラトンは、それさえさせないように、四人目の名前を出していないと解することも可能であるといえよう。

ソクラテスをもてなすはずであった四人目の彼は、この日の集まりに欠席したことで、もてなしをすることが叶わなかった。このことにより、ヘルモクラテスに対しても、この日は欠席した四人目の彼と同様、物語上ではなし崩し的にということにはなるかもしれないが、必ずしももてなしをしなければならないわけではない(あるいはなくなった)とプラトンが想定していたとする解釈の可能性は、先に言及したようにヘルモクラテスに関する言及がなされていないことから、『ティマイオス』執筆開始時点(すなわち冒頭の時点)では、多少なりとも残っているようにも思われる。もちろん、先述のように、『クリティアス』においては、もてなしの内容は不明であるけれども、ヘルモクラテスはクリティアスの次にソクラテスをもてなすことになっているため、プラトンがヘルモクラテスに対して、どこまで本気でもてなしをさせようとしたのかについては、『ティマイオス』執筆開始時と『クリティアス』執筆開始時において多少の違いがあったかもしれないという、解釈の余地が残されているけれども。

### 3-3 昨日のおさらいと『クリティアス』への仄めかし

『ティマイオス』では、宇宙創成のミュートスが「ありそうな話」として語られるというもてなしがティマイオスによりなされるが、それが始められる前に、昨日のおさらいとしてソクラテスにより『国家』において示された理想国家についての簡潔な話がなされる。その後、クリティアスにより『ティマイオス』の続編となる『クリティアス』の内容を先取りするかのような、かつてのアテナイ人の人々についての話（すなわちアトランティスについての話である）が述べられる。

そして、先述のように、ティマイオスが宇宙の生成から始めて、人間の成り立ちのところまで話し、その次にクリティアスがかの往時のアテナイの人々についての話をするという、『ティマイオス』と『クリティアス』の展望が語られる。

『ティマイオス』の序盤がこのような展開となっていることから、『国家』と『ティマイオス』と『クリティアス』の関係が考察の対象となることは、自然なことであるようにも思われる。この点についてたとえば Johansen は、『国家』における正義とその益に対するアプローチは内的なものであり、それでは不十分であるとする。その上で、『ティマイオス』において、戦争の際の守護者の役割に関しての『国家』における説明での不足が補われていると解する<sup>(7)</sup>。たしかにこのような解釈も可能ではあろう。とはいえ、ここでは、この三つの対話篇が物語として完全な連続の上にあるかどうかについてプラトンがどこまでそれを意識していたかという問題に深く立ち入って考察することはせず、『国家』が昨日の出来事であるとしてソクラテスにより語られるという形式で書かれた対話篇であることに言及するにとどめることとする。

鍵となることのひとつは、先述の、ティマイオスによるミュートスとソクラテスによる理想国家制についての簡潔なまとめを踏まえたうえでのかの往時のアテナイ人についての話をしていくと決まったとされる箇所(27a-b)や、「驚嘆すべき偉業の数々が、その昔、アテナイの国によって成し遂げられていた」(20e) ことについての話(21a-26e)であろう。これらの箇所からは、プラトンは『ティマイオス』執筆当初から続編の『クリティアス』の執筆をかなり具体的なところまで意識していたと解されうるだろう。そして、このような構想の実現のために『国家』のおさらいが必要であったともいえるだろう。『ティマイオス』におけるおさらいも『クリティアス』におけるアトランティスの話もパスティーシュであるか歴史的出来事を模造したもの

であるが、それは『国家』における理想国の具体例がプラトンにより示されたものと解されよう<sup>6)</sup>。

この箇所<sup>5)</sup>の検討からも、『国家』と『ティマイオス』そして『クリティアス』には、それなりに強い関連のあることを、プラトンが意識していたことは確かであろう。そして、それは『国家』がソクラテスにより語られた昨日の出来事であること、『ティマイオス』と『クリティアス』が、ソクラテスへのもてなしとして語られているという、形式的な面での相似からも、推測は可能であろう。

ここまでで『ティマイオス』の冒頭から序盤にかけて検討してきた。この日欠席した四人目やヘルモクラテスに対しては、「もてなし」の語りをさせようという意図をプラトンが特に強く持っていたかどうかは不明ではあるが、クリティアスに対してはその意図を持っており、『国家』との関連そして『クリティアス』におけるアトランティスの物語へと繋がる展開が仄めかされている。それは「もてなし」としてなされることが意図されているということでもある。

それでもなおまだ必要な考察が欠けているように思われる。それは、プラトンが独り語りをどのようなものであるとしていたかについて——すなわち、プラトンが哲学という営みにおいて独り語りをどのように位置づけていたかについての考察がなされていないということである。それは具体的には、『ティマイオス』冒頭の「もてなし」の語の相違に関する検討と考察、そして「ありそうな話」についての考察でもある。これ以降で、これらの問題について考えていく。

#### 4 『ティマイオス』冒頭の「もてなし」について

『ティマイオス』冒頭のソクラテスの発言を、もう一度見てみよう。それは、このようなものであった。

ソクラテス 「一、二、三……、四人目は、親愛なるティマイオスよ、どこにいるのかい？ 昨日は私のもてなし、今日は私をもてなすはずの——？」

(70a)



このソクラテスの発言において、「もてなし」の語が二回登場する。ここでは訳し分けていないが、異なる語が用いられている。前日のソクラテスによるもてなしは「*δαιτυμόνων*」という語で表現されているのに対し、今日のティマイオスが行うことになるもてなしは「*έστιάτοπων*」という語である。

ソクラテスによるもてなしを表した *δαιτυμόνων* は、*δαιτύς* からきている。このもてなしは、食事を思い起こさせる。もしかしたら、皆で食事をするようなイメージを思い起こす読者もいるかもしれない。それはたとえば、狭い部屋の中でぐるりと円くなってお酒を飲みながら語る『饗宴』の場面設定のようなものであるといえるかもしれない。あるいは誰もが対等に語ることのできる空間のイメージかもしれない。

それに対して、ティマイオスが行うことになるもてなしを表した *έστιάτοπων* は、*έστία* からきている。このもてなしは、炉辺に集い、中心に火が熾されており、それを囲んでいるようなようすを思い起こさせる。この中心に火が熾され、そしてともされているイメージを、プラトンが重視したとしたらどうだろうか。この語を用いることで、ここからデーミウルゴスを、そして宇宙創成のミュートスのようなものを読者が思い起こすようにという、プラトンによる暗黙の導きかもしれない。

プラトンは、この箇所では明らかに、ソクラテスが昨日語った『国家』の内容をおさらいしたような理想的な国制についての話と、今日話されることになるティマイオスによる宇宙創成のミュートスを、この二つの語を用いることで、対比していると解されよう。というのも、ここで二つの語の使い分けをしているということは、食べ物と炉に熾された火というそれぞれの「もてなし」における相違を、プラトンは意識していたはずだからである。それは、昨日のおさらいとしてのソクラテスの語りと今日のティマイオスの語りを、この二つの語を冒頭に示すことにより、プラトンは『ティマイオス』における哲学的内容と語りの方を読者に仄めかしているといえる<sup>9)</sup>。そしてその仄めかしは、哲学問答であるディアレクティケーと独り語りの対比をも含んでいると、あるいは少なくともプラトンはそのような対比を意識しているといえるように思われる。

## 5 「ありそうな話」について

『ティマイオス』における「ありそうな話」に関する解釈には、「ありそうな話」

の語の意味に関するもの、また、プラトン哲学における探究の方法としての信頼性に関するものが多いように思われる<sup>(10)</sup>。たとえば、Burnyeat は、εἰκῶς を「ありそう」(likely) や「もっともらしい」(probably) と訳すことに対して、「よく言えば誤読であり、悪く言えばプラトンの意図を歪めている」と述べつつ、そのような訳語を採用する解釈者に対して批判的な立場を採る<sup>(11)</sup>。さらには、εἰκῶς は「もっともらしい」よりも非常に広い意味の幅を持つことを示す<sup>(12)</sup>。そして、プラトンは εἰκῶς という意味の幅の広い語を利用し、また εἰκότως という関連する語についても「適切である」(reasonably) の意味として用いているとする<sup>(13)</sup>。この解釈に対して、Betegh は批判的な立場を採る<sup>(14)</sup>。Brisson は、プラトンの対話篇において εἰκῶς は修辭的な意味と哲学的な意味の二種類があるとしつつ、『ティマイオス』においては「知性により理解できるアイデアの似像に関わる神話」を意味していると解する<sup>(15)</sup>

また Cornford は、近代科学が夢見ていたような自然法則についての正確で文字通りの言明ではないとし<sup>(16)</sup>、また『ティマイオス』がミュートスであることについては、真実についての正確で自己調和した言明に帰しえないことと、宇宙論が宇宙創成という形で役回りを与えられていることという二つの意味があるとする<sup>(17)</sup>。それに対して Vlastos は、プラトンはこれにより、真実でありうるかもしれない何かとしての「信頼できるもの」であると考えていると解する<sup>(18)</sup>。そして、「ありそう」であることによってプラトンが意味しうることの全ては、それを信じることに不利になるような説得力のある理由は何もないとする<sup>(19)</sup>。

このように、『ティマイオス』において展開される存在論としての宇宙創成のミュートスについての「ありそうな話」の真実らしさの度合いに関する解釈は、もちろん重要である。しかし、「ありそうな話」に関する解釈は、このような論点のみでは終わらないようにも思われる。このような解釈上の問題を踏まえつつも、その上さらに、独り語りであることが「ありそう」であるという意味での「ありそうな話」である可能性を探るといふ解釈についても、そのような解釈が妥当であるかどうかという問題も含みつつ考察することが妥当であるように思われる。

プラトンの対話篇において、哲学探究を行うための方法の主たるものは、ディアレクティケーである。それに対して、宇宙創成のミュートスがティマイオスにおいて語られる「ありそうな話」は、独り語りであって対話ではない。したがって、どれほど哲学探究の対象になりうるような内容（たとえば『ティマイオス』においてはアイデア

論、場の理論、要素三角形等が提示される。それらはどれも十分に哲学探究の対象になりうるものであるといえる)を話したとしても、ディアレクティケーによるものではない。それゆえディアレクティケーの方法、すなわち、適切な質問を行うことによって、そしてそれを続けることによって、探究の対象を吟味検討し、探究の対象を把握することを目指すという哲学探究の方法と比較すると、独り語りは探究の方法としてはその点において欠けているといわざるをえない。

独り語りは、ディアレクティケーではないため、問答を行う相手同士による相互吟味が行われぬ。そのため、自分の有する何らかの見解の不備や欠陥を見落としたり、すぐに見つけられなかったりと、よりよい見解へと発展させるのに時間がかかるかもしれない。また、独り語りは、ディアレクティケーのような吟味がなされない以上、それにより示されるものは、高いレベルでの吟味の俎上に乗る機会がないか、あるいは(極端に)乏しいものであるともいえるだろう。このように、独り語りにおいては、哲学問答においてなされることがなされないため、その方法により語られる内容は、ある程度の蓋然的正しさ以上のものを担保することができないようなものであると解することも可能であろう。

そして、このある程度の蓋然的正しさのレベルがどの程度のものなのかについても問題となるだろう。それは、仮設の前提に基づいてなされる探究に近いものであるというわけではない。仮設の前提に基づいてなされる探究は、探究の出発点となる前提は仮設された前提であるが、探究においては対話する者たちによる同意が必要となる。そのため、この探究における正しさの蓋然性は、仮設に帰される。それに対して独り語りは、当然ながら対話ではない。そのため、聞き手の吟味をその都度受けて進められるものではない。それゆえ、独り語りによる「ありそうな話」は、『国家』における線分の比喩の認識の四段階におけるディアノアのレベルに該当するというものではない。しかし、ティマイオスによる独り語りは「ありそうな話」として、一定の評価がなされており、またそもそも対話ではないということも踏まえれば、独り語りによる「ありそうな話」は、線分の比喩のどのようなレベルに該当するかといったものではなく、それとは異なる方式の探究であると解することが妥当であろう。それは、『ティマイオス』において言及されている宇宙論、イデア論、音階論、要素三角形(そしてそれに関わる幾何学)といった様々なレベルの探究の様々な対象に関してティマイオスが独りで語るという方法に帰される、あるいはそのような独り語りがあるよう

なものであるがゆえに避けられえない、哲学の対象に対して語られることもあるけれども、一方で対話の相手による相互検証の介在しない、他方で論争的なものではない、そして成功的になされる<sup>(20)</sup>ような「もてなし」的な穏健さを有する、ある個人による物語るという行為であると解することが妥当であろう。

## 6 まとめ

プラトンは、『ティマイオス』において、「ありそうな話」として宇宙創成のミュートスをティマイオスが独り語りするという形式で執筆した。それは対話による哲学問答ではないがゆえに相互検証のなされないものであるために、哲学探究としては欠けたところがあるけれども、この対話篇の冒頭においてソクラテスが述べる「もてなし」としての「独り語り」であることも考慮しつつ解するならば、それは哲学の探究の対象を成功的にそして穏健に物語るという行為であるということが、ここまでの論考によって示されたといえよう。

## 註

- (1) 書簡に関しては、『第七書簡』でさえ偽作ではないかという解釈(例えば Burnyeat, Frede, *Pseudo-Platonic Seventh Letter*) が展開されることもあるためにプラトンにより著されたかどうかは議論の余地があるだろうが(本論考においてはこの問題に関しては検討しない)、そのような問題があるとしても、プラトンにより公開書簡の形式で独り語り(書簡に関しては、自身の経歴の独白と言う方が妥当であろうか) が展開されている可能性があるということはいえるだろう。
- (2) 『ゴルギアス』におけるこのような展開が暗示されているカリクレスによるこの冒頭の発言に関する詳細な検討については、松井(2014)を参照せよ。ところで、『ゴルギアス』における論争的な問答である論駁法(エレンコス)は、ソクラテスとカリクレスとの対話において色濃く展開されているように解されよう。ソクラテスの論駁法の形式に関しては、Vlastos(1991)を参照されたい。
- (3) 『国家』が著された後、次に『ティマイオス』『クリティアス』が著されたということではなく、対話篇における連続性が暗示されているということである。
- (4) これ以降の『ティマイオス』の訳は、基本的に『プラトン全集』における種山訳を引用しつつ、適宜改変したものとなっている。ただし、この箇所については筆者の訳である。この訳ではふたつの「もてなし」(種山訳では「御馳走」とされ

- る)は異なる語であるが、意味としては大まかには同様であることもあり訳し分けてはいないが、第3章において、異なる語であるこのふたつの「もてなし」に関しての考察がなされる。
- (5) これ以降の『クリティアス』の訳は、基本的に『プラトン全集』における田之頭訳を引用しつつ、適宜改変したものとなっている。
- (6) プロクロス (pp.19-30) によれば、彼の時代においても幾つかの候補が挙げられており、テアイテス、クレイトポン、プラトン等が解釈者により挙げられているが、プロクロスはどれも妥当な人選ではないとする。また Burnyeat (1997, pp.321-ff) は、このプロクロスの実でなくポルピュリオスやイアンブリコス of 解釈も紹介している。特にイアンブリコスの解釈—ここでは、 $1+2+3+4=10$  となれば完全数だが4が欠けているためにこれを完成させられないことや、四人目は欠席することが本意ではなかったといった解釈—to紙幅を割いて紹介している。
- (7) Johansen (2004), pp.9-10
- (8) Brisson (1998), p.14
- (9) これは、基本的に、Burnyeat (1997, p.308) と同じような立場である。
- (10) この点に関する検討は、松井 (2013) においても行われているが、本論考においては、そこでの検討の簡潔な要約 (Cornford (1937) や Vlastos (1975) への言及は基本的にはこれに含まれる) に加え、「ありそうな話」の「エイコース」の意味の特定を行っていくこととなる。
- (11) Burnyeat (2009), p.167
- (12) Burnyeat (2009), pp.168-170
- (13) Burnyeat (2009), p.171
- (14) Bretegh (2010), p.214
- (15) Brisson (1998), pp.128-130
- (16) Cornford (1937), pp.28-33
- (17) Cornford (1937), p.31
- (18) Vlastos (1975), p.93
- (19) Vlastos (1975), p.93 n.40
- (20) Betegh, p.239

## 参考文献

- Betegh, G. What Makes a Myth eikōs? Remarks Inspired by Myles Burnyeat's 'EIKŌS MYTHOS', *One Book, The Whole Universe: Plato's Timaeus Today*, Parmenides Publishing, 2010, pp.213-224
- Brisson, Luc. *Plato the Myth Maker*, University of Chicago Press, 1998
- Burnyeat, M. F. Eikōs muthos, in: Catalin Partenie (ed.) *Plato's Myths*,

- Cambridge University Press, 2009, pp.167-186
- , *First Words, Proceedings of the Cambridge Philosophical Society*, 43, 1997, pp.1-20
- Burnyeat, M.F., Frede, M. *Pseudo-Platonic Seventh Letter*, Oxford, 2015
- Cornford, F. M. *Plato's Cosmology*, Routledge, 1937
- Johansen, T. K. *Plato's Natural Philosophy: A Study of the Timaeus-Critias*, Cambridge, 2004
- Proclus, *Commentary on Plato's Timaeus vol.1*, Cambridge, 2007
- Vlastos, G. *Plato's Universe*, Washington, 1975
- , *The Socratic Elenchus, Socrates Critical Assessment*, Routledge, 1991, pp.28-59
- 種山恭子（訳）『ティマイオス』プラトン全集 12 巻、岩波書店、1975 年
- 田之頭安彦（訳）『クリティアス』プラトン全集 12 巻、岩波書店、1975 年
- 松井貴英「科学あるいはミュートス——プラトン『ティマイオス』における「ありそ  
うな話」」『教養研究』20 巻 1 号、2013 年、1-16 頁
- 「『メノン』『ゴルギアス』冒頭の発言の比較」『教養研究』20 巻 2・3 合併号、  
2014 年